

芥川だより

発行日 * 2022年7月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
発行人 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



あなたは先祖さんに守られている

昨年の秋、義母の容態が悪くなったので近くの占い師を訪ねた。ショッピングセンターの一角にある小さな占いコーナーの開店 10 分前に行き椅子に腰かけていた。するとすぐに一組の客が来て私の横に座った。すでに占いが始まっているようで、話が漏れてくる「あなたが、そう考えるなら離婚しなはれ…」幾度も来ている客のようで占い師さんもしびれを切らしている様子だ。

しばらくして40過ぎと思われる女性がカーテンを手で押し開けて出てきた。「お先でした」と言って廊下に消えた。私は、かなり気負ってカーテンの奥に入った。義母の死亡時期を確かめたかったので、義母と私の氏名と生年月日を紙に書いて占い師のおばちゃんに渡した。大阪のおばちゃんといった感じの占い師は私ぐらいの歳であろうか、テキパキと判断材料を割り出す。

最初に言った言葉は、「あなたみたいな男性がいるんやね」「あなたの仏と義母の仏が重なる月が11月と1月ですから、そのあたりが寿命かと…」その言葉を聞くために私は来たのだから、もう聞きたい事はない。すぐに帰ろうとして金を払おうとしたら、「あなたは優しい人やね。初めて聞いたわ、義母さんの介護をして最後まで看取るなんて、いるんやねー」としきりに私の事を感じする。そして、占い師は私の書いた氏名と生年月日をまざまざと見て「あなたは、先祖さん、母方の先祖さんに完璧に守られているわ」と語気を強めた。

占い師のリップサービスかとも思ったが、これまでの人生を振り返ってみれば、思い当たることもある。義母は占い師の予言通り11月5日に息を引き取った。2週間後から私は警備の仕事を始め、11年飲み続けてきたステロイド剤の減量を開始した。1年以内に薬を飲まなくてもよい日が来るかもしれない。難病の多発性筋炎を完治出来る日も近づいてきた。私の奇跡がまた一つ起きそうだ。

死をめぐるあれやこれ(92)

石川 吾郎

亡き友と生きる

彼が亡くなったのはまだ五十台のときだった。彼は大学の先輩。卒業後も時々、会ってはいいた。だがその電話は突然だった。今日会いたいというのだ。木屋町の静かな店で、ガンを宣告されて手術を受けることになったと。かなり珍しいガンなのだ。普段は明るいユーモアの持ち主の彼が不安そうに言った。手術ができるのは完治の可能性があるからと私は励ました。それから一年ほどだったろうか。再び彼からの電話。同じ店で会うと、転移が見つかったと。今度は慰めの言葉はどこを探してもなかった。ただ家族との旅を勧めた。しばらくして、入院を聞いて見舞いに行った。それは川べりの病院だった。二度目に、共通の友人とともに見舞いに行ったが、その朝に彼は亡くなっていった。彼は一人倍社会を憂えていた。今、この、時代の変わり目に彼だったらどうしていたらと、考える。私は亡き友と共に生きている。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 92	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 100	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 50	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 56	下村嘉明	5
オクラの山たより 70	因了生	6
隠された歴史 45	満田正賢	9
プロバガンダに騙されるな		
し学び直そう戦争と憲法の歴史 成瀬和之		12
(四)		
俳句	土田裕	13
	影山武司	
編集後記	S K 生	13
ふみの道草 49	山椒魚	14

素老人☆よもだ帳 (100)

坂本一光

◆桃熟れて命は水の美しさ

この句には元句がある。私の故郷松山の柳人、前田伍健の、

菊人形命は水の美しさ

である。この句を知ったのは数年前、桃の季節だった。句を読んで私は、伍健さん、菊人形じゃないでしょう、桃のこの美しさこそ水の美しさですよ、と話しかけたくな

った。そのとき詠んだのがこの句である。ちなみに、伍健さんのことは、その句「考えを直せばふつと出る笑い」にまつわる父の思い出としてこの欄に紹介したことがある。(素老人☆よもだ帳(4)、『芥川だより』No.90,2014.7.1)

話は逸れるが、菊人形と言えば思い出すことがある。ずいぶん前のことだが素老人は寝屋川市に住んでいた。隣接する枚方市には京阪電鉄が運営する遊園地「ひらかたパーク」があり、秋ともなればNHK大河ドラマ仕立ての大菊人形展でにぎわったものだった。その菊人形も何を今さらのご時世か、はるか以前に途絶えてしまった。

大分の義父などは、孫に会いたさと菊人形見物を口実に秋ともなれば毎年大阪に出てきたものである。そして、夫婦そろって毎度よろしく孫を連れては出かけていった。菊人形展が今年限りとなったと風の便りに知ったのは、山陰の大学に単身赴任していた時である。後で聞いたが、当時大阪にいた孫はわざわざ見に行ったという。祖父への追悼の思いだったのかもしれない。それはさておき、今年桃が豊作だった。十二年前に庭に植えた桃の木は高さ三メートルを越え(育て過ぎで失敗)、枝々は狭い庭に覆いかぶさるほどに成長した。桃は満開の花を付け、花という花にすべて実を付ける。放っておけば自然に落下する実は落下するが、とりあえずは数百個の実を付けたと思える。いくら何でも思い、例年以上に摘果もしたが、多分二百個程は

収穫できた。消毒はせず、手の届く範囲は袋掛けをする程度なので、開花時に産みつけられた虫の所為か大きくなり色づいてからも落下するもの続出。それらは甘みがるまで水に溶けて流れたような味で、要するに満足に熟していない。それでも、大きくて見とれるように美しい色合いと香りを持ち、それにふさわしい味の桃もたくさんあった。

桃の苗は、大分県中津江村(現在、日田市)の鯛生金山跡を見学に行った時に買った鉢植えのものである。鯛生金山は、松本清張の長編小説『西海道談綺』の舞台として有名で、ドラマにもなった。この金山は佐渡などと違って知る人ぞ知る金山ではある。そう言えば島根には世界遺産にもなった石見銀山があつたが、ここで産出した銀は世界に流通する銀の3分の1を占めたという。日本が鎖国していた江戸時代の話である。

どうしても実のなる木がほしくて買った桃の木は、高さ50cmほど、鉢植えなので伸びないように梢が切られていた。桃の種類は「氷川」(日川)とあつた。庭に植えたが、桃栗三年という具合には成長しなかった。しかしいつの間にか芽を出した側枝が年ごとに成長、元の幹は枯れ果てたが、側枝は1mとなり2mとなり新たな幹となった。開花は数輪がしばらく続き、枝々満開になるのに五、六年はかかったと思う。それからは、食べる桃は食う、食えない桃はジャムにすることができるようになつ

た。

さて、ジャムを作るために桃の皮をむき、実を切りながら、桃の傷みやすさをつくづく思った。とりわけ虫の入った桃は、表面も汚く、種も割れていたり実も良く成長していなかったりする。味は、無味でさえあれば儲けもの、ジャムにするに不服はない。そんなときである。「内部から腐る桃」という茨木のり子の詩に出合った。彼女が三十歳になる直前に出した詩集『対話』(不知火社、一九五五年)のなかの詩である(谷川俊太郎選『茨木のり子詩集』、岩波文庫、二〇一四年)。

内部から腐る桃

茨木のり子

単調なくらしに耐えること
雨だれのように単調な……

恋人どうしのキスを

こころして成熟させること
一生を賭けても食べ飽きない
おいしい南の果物のように

禿鷹の闘争心を見えないものに

挑むこと

つねにつねにしりもちをつきながら

ひとびとは

怒りの火薬をしめらせてはならない

まことに自己の名において

立つ日のために

ひとびとは盗まなければならない

恒星と恒星の間に光る友情の秘伝を

ひとびとは探索しなければならない

山師のように 執拗に

〈埋没されてあるもの〉を

ひとりにだけふさわしく用意された

〈生の意味〉を

それらはたぶん

おそろしいものを含んでいるだろう

酔酩の鏡を取るよりはるかに！

耐えきれず人は攫む

贖金をつかむように

むなしく流通するものを攫む

内部からいつもくさってくる桃、平和

日々に失格し

日々に脱落する悪たれによって

世界は

壊滅の夢にさらされてやまない。

.....

「内部からいつもくさってくる桃、平和」

「世界は壊滅の夢にさらされてやまない」

この若い詩人は、「まことに自己の名にお

いて立つ日のために」何を訴えようとした

のか。

桃熟れて命は水の美しさ

そうであると同時に、私たちはまた、

かなしくも内から腐りゆくいのち

を抱えていることを自覚しなければならないのかかもしれない。

今日は、梅雨の晴れ間の猛暑に台風のよ

うな熱風が、やけに体に吹き付けてくる一

日だった。

（かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人）

『哲学爺い』の時事放談(50)

祖蔵 哲

『主権の哲学』

今年の梅雨は異常だった。気象庁は6

月28日に、近畿地方が梅雨明けしたと

発表した。6月に梅雨明けするのは過去

にない早さで、今年の梅雨の期間は14

日と、過去最も短くなった。そしてまだ

6月にも関わらず連続的な猛暑日がつづ

く。これも観測史上初の「異常気象」ら

しい。しかし、この暑さだというのに「新

型コロナ感染」防御マスクは外せない。

というか当局は熱中症リスクとして着用

を控えるよう警告しているが、世間はな

かなかそれを許さない。これは、日本特

有な体質であつて、法律で決めたもので

なく、共同体的「空気が決めた」もの、

いわば「体質化」された「法（ノモス）」

「掟」はなかなか変えられないのだ。そ

して、「戦争」これもなくなならない。

このところずっと同じことを書いてき

ているが、私たちが現在直面しているこ

の「地球環境問題」「感染症」そして「戦

争」、これらは人類誕生と共に発生してい

たものであり決してなくなったりしたも

のではないという点である。そして「近

代」以降その異常さの速度が増している

だけなのだ。さて、その戦争、「ウクライ

ナ戦争」である。

ロシア軍がウクライナに侵攻して以来

今年6月24日で90日目を迎えた。丸3

カ月だ。ウクライナは徹底抗戦を標ぼう

し、西側諸国は武器援助で応えている。

ウクライナは小国である、一方ロシアは

大国だ。しかし、その小国の背後には西

側諸国がつく。そして両国が自国に都合

のよい「現実」を作り出し、大国の後押

しで比較的小規模の地域で戦闘を起こす。

「ハイブリッド戦争」と呼ばれる現代の

戦争形態である。

情報戦などを組み合わせていることが特

徴である。そして現在のウクライナ戦争

は東西冷戦期の第三世界で見られた「核

抑止と非正規戦」の組み合わせを欧州に

適応しものとみられる。ロシアは自身の

勢力圏への軍事介入を正当化とする方法

としてこれを応用している。ソ連時代に

比べて国力・軍事力共に低下したロシア

は、NATOと直接対決することが不可能

なため、自国に可能なローコスト・ロー

テクな方法で NATO に対抗できるよう

にしたのがこの戦略である。ロシアがい

う非正規軍の「特別作戦」や核抑止によ

る「核の脅し」、そして「ネオナチ」とい

う「プロパガンダ」はこのすべてにあて

はまる。「核兵器」や「情報操作」は今や

「通常兵器」よりもローコストなのであ

る。

「戦争は開始するより終わらせるほう

が数段階難しい」と言われている。この戦

争をどのように終わらせるか。西側諸国

は大国中国、非西側諸国の出方を見据え

徹底したロシアの弱体化を望んでいるよ

うに思われる。これは「見せしめ」を目

的とする「平和のための戦争」だ。つま

り、この戦争は「西側の平和」という目

標を達成するための手段ということであ

る。ただ、その「平和」がいかなるもの

なのかは誰の合意もないままである。こ

のような段階に入っているため大方の見

ないようにするのが問題であるが、戦争の開始自体は現在も明確に禁止されていない。どんな国家であれ戦争する目的はそれぞれの自己都合で正当化できるし、そしてまた「国家」であればその決定権が自国にある。それが近代「主権」国家の本質である。そしてそれゆえに「戦争」がなくならない。それが主権のアポリアである。

(1) 主権とは何か

主権とは「至高性」を意味するフランス語から来ており、何にも勝る神の権力に相当する最高の権力という使われ方をするようになる。この主権概念は、19世紀ごろの西ヨーロッパにおいて、絶対君主が支配するいくつかの領域国家が形成されてくるなかで登場した。絶対君主は、この概念を用いることによって、対外的にはローマ教皇からの宗教的干渉を排除し、対内的には、貴族層、身分制議会、教会、ギルドなどのもつ封建的諸権力の上位に君権を置くことによって政治的・経済的統合を達成しようとした。この意味で、主権概念は、どの国においてもまずは君主主権論という形をとって出発した。

主権の内容としては、国内的には立法権、課税権、貨幣鑄造権など、国外的には宣戦講和の権がある。そしてフランス革命以後の国民主権主義での近代国家にあつては、これらの権限は国会（議会）

が掌握している。したがって、近代民主主義の歩みとは、かつて君主がもつていた諸権限（主権）を、国民や議会の側に奪い取った歴史であるといえる。

(2) 「戦争」をおこす原理としての「主権」

主権に属する諸権利のなかでも戦争の権利は至高の権利とされる。つまり、「主権」とは一つの国家の「人格」であり、それは国民の集合体であるから「生命の防御」つまり「自衛権」の発動たる戦争は古代よりまず神法や自然法の実現手段として要請されてきた。しかし、さらに戦争は、主権を維持し、反乱や内乱を防止し、臣民間の友愛関係を維持する最上の手段であるがゆえに必要不可欠だとされる。戦争がなければ、臣民のあいだの平和と友愛とを保持することはほとんど不可能だった。つまり主権国家にとつて、自らの存在を否定するものと存在をかけた対峙する戦争は、主権の存続のために、その「仕上げ」のために必要不可欠なものであり、主権の本質を規定するものである。よつて人格たる国家主権は他者と常に対峙することにより「自己同一性」（アイデンティティ）を確認しているのだといえる。国家は戦争によつて常に自己の存在を確認しなければならぬ。その権利が主権だともいえるのである。

(3) 主権の放棄と世界政府

様々な主権国家がそれぞれ各自の主張を通すようになると世界はアナキー状態となりコントロールができなくなる。国家が主権をもつかぎり完全な国際平和を確立できないことになるのか。だとすれば、一つの共通権力を設け、各国が主権を放棄して共通権力の下に行動する

「世界契約」に基づいた「世界政府」の設立へと向かうべきであるのか。それによつて、主権概念の対内的側面としての民主主義のみを残し、対外的側面である国家主権とそれに基づく戦争を廃棄することができないのではないか。それは戦争の廃棄を前提とするとき、ある意味で必然的な道筋であろう。事実、かつて世界はこの試みを幾度も経験した。しかし、それによつて「世界警察国家」へととなり、「集団安保」の名の下で同じ事態が繰り返し起こってきた。そこではあらゆる権威が集中することによつて、普通の名の下でより強力な排除の論理とそれに基づく暴力が行使される可能性も残る。問題は、主権概念そのものである。

(4) 主権と国際法のアポリア

国家主権が至高である以上、原理上、主権に基づく戦争にはいかなる法も適用しえないことになる。この意味で、国際法にもとづいて戦争を廃絶することを望むのであれば、主権の廃棄は当然のはずである。しかし、現在、それにもかかわらず主権概念が存続しているのは、実は

国際法自体が主権を必要としているからである。それはまず、法の下で契約を結び、あるいは処罰の対象となるために、国家が「主体」としての同一性を保つ必要があるからである。問題はむしろ、法が主権を、そして主権に基づく戦争を自らの基盤として必要といることにある。主体としての主権なしに国際法を考へることができず、起源の暴力としての戦争なしに国際法を考へることはできない。それゆえ、いまだに主権国家を越える超国家法は存在せず、諸国家や人民を越えた法の基盤は存在しないのである。現在の国際連合がこのウクライナ戦争に関しても無力であるというこのことを物語っている。

(5) 人道的介入と主権

国家主権の廃棄はできないが、その制限の方法はある。それが「介入」である。特に「人道的介入」は「自衛権」とならんで軍事の必然性の暗黙の前提となっている。一般的に人道的介入とは、「ある国で、住民に対して大規模に苦痛や死がもたらされているときに、他の国や国際機関が、それを止めることを目的として、その国の同意なしに軍事力をもつて介入すること」と定義される。人道的介入が問題になるのもやはり、それが被介入国の主権を侵害することになるからである。ただ人道的介入の主要な問題は、誰が、どのように介入を行うのかという点にあ

る。

誰がという問いについては、先の定義に従えば、単独もしくは複数の主権国家か、国連かということになる。国家の場合、恣意的な介入が行われる可能性が大きく、また現に行われてきた。今回のウクライナ戦争もロシアは「ネオナチ」の手からロシア系住民を守る「特別作戦」と位置づけた。つまり「介入」である。

その他、過去にはドイツによるチェコのズデーテン地方の併合、NATOによるユーゴ空爆など、これまでのほとんどの人道的介入が、人道問題を口実にした武力行使であり、その意味で人道的介入の歴史は「長い不正と暴力の歴史」であったと言える。また、国連であれば問題がないわけではない。現在の国連の体制では、強国大国の新植民地主義的な覇権秩序体制を支える結果になることが多いからである。

(6) 主権の多様性とアポリア

「主権」というものを国家の独立性の主張権とみなせば、様々な解釈が可能である。事実、ウクライナ戦争に関して、ロシアのプーチン大統領はこの「主権」を自らの正当性の根拠として幾度も言及している。6月11日、国際経済フォーラムで、核兵器を念頭に『国家主権を守る必要がある場合には使用する。』と述べた。そして同月9日の国内での集会では『主権を持たない国は厳しい地政学的争

いの中で生き残ることはできない』世界情勢は急激に変わっている、指導的役割を求める国なら主権を確保する必要がある。主権ある決定ができない国は植民地であり、その中間はない。』とも。彼は米国などいわゆる「西側諸国」の影響力を排し、独自の判断ができる国を「主権を持つ国」と呼ぶ傾向があり、ウクライナ侵攻を理由とした欧米の制裁などの圧力に屈しない姿勢を強調している。しかし、この主権の解釈も「主権の多様性」のひとつとして認めるなら、この意見も認めねばならないということになる。これも「主権のアポリア」である。

「万人の万人に対する闘争」での「社会契約論」を著したJ・ホッブスの「リバイアサン」の表紙には怪物が巨人のように描かれているが、よく見るとその体は無数の人間からできており、王冠を戴き、右手には剣を、左手には聖職者の持つ牧杖を持っている。剣は世俗的（非宗教的）権力を、牧杖は宗教的権力を象徴している。これが「主権国家」のイメージにつながる。しかしそれはまた依然として「暴力性」も保持しているということも忘れてはならない。



ホッ布斯「リバイアサン」も表紙の絵

大峯奥駈道 (56)

下村 嘉明

体験型人間学 6

念ずれば通じる、というけれど現実には前号で書いた腰の曲がった爺様と二人で仕事をすることになった。当日は、喜んで出かけたら現場の横の公園にすでに老人は腰掛けて私を待っていた。挨拶をしながら、爺様の警備会社の経歴を聞く。社歴が古ければ、とりあえず当日の職長になるから聞かざるを得ないし、相手も答えざるをえない。

爺様は、私は社歴が3年ほどです。75歳まで夫婦で電気会社の関連企業で働

いていました。家内の年金の期間が足りず、会社に頼んで75歳まで二人働けるようにしてもらい、75歳で退職しブラブラしていた時に、喫茶店で知り合った人から警備会社の事を聞き応募して働いています。家内は、初期の卵巣がんが見つかり治療を受けました。元気にしてます。

前回の時とは違い、軽い調子で話された。80歳にしては元気だが、少しの不安をその立ち姿から感じるが、そんな事は言えないので、今日は爺様にリーダーになつてもらい仕事をやる。休憩中にもあれこれ聞くが、もう昔の事はねーと話が終わってしまう。しかし、私が家内の乳がんの事を話すと、奥さんが卵巣がんを見つけた時の事を熱心に話された。なんでも奥さんがテレビをみておられて自分も同じような症状があるからと病院にいくと卵巣がんの初期だったそうである。

もうひとり気になっていた人がいた。40日間も一緒に働いた58歳のひとだ。私の独断ではコミュニケーションの発達障害を感じる人なのだが、本人は余計なおせっかいと言いつつもビビッていた人だ。ある時、阪急の乗り換えのホームで彼を見かけた。声をかけようとしたが、余計なおせっかいと思いやめて、人ごみにまぎれた。今の私が彼に声をかけても、彼が喜びそうな事は言えない。上から目線の心配ごとを言うだけだと思った。彼

と同じ目線で気楽に話が出来るのはまだまだ先だろう。

もう一つ私のミスでスマホ操作を間違えラインを消してしまい復活したら、何人かから返信があった。その中に親しかった先輩の奥さんからのメールと山の後輩からのメールがあった。それ以外の人には、事のいきさつを説明したあいさつ文を送ったが、二人には電話をした。先輩の奥さんは、80歳になった今も、独り暮らしをしながら、週2日の介護仕事をされている。私が、警備の仕事をしていると伝えると、えらく嬉しそうに話が続いた。もう一人の後輩にも連絡し、仕事の事や山の事を話すと昔の思い出がよみがえり出会って一杯やろうということになった。ふたりに共通するのは、意外な人生を楽しくやって生きてきたことだと思ふ。とても普通の人なら話したくない人かもしれないが、私のは妙に興味があわくし人間らしく思えるのである。

2年ぶりに会ってみると依然と同じような風貌で、どこかの浮浪者のように見える。相変わらずなあと思いつながら、ビアホールでビールを飲む。彼もなかなか強くて二人で生中を16杯を飲み7時間余りニュー東京にいた。私も結構楽しかった。また声をかけてくれる事を願って飲み代は私が払った。この頃はすっかり飲み会が減り楽しみがない。頼るべき飲み相手は先輩だから、先輩から誘われたら断らずに参加し飲み代も多めに

出す。こんなことを、自分に対する言い訳にしている。

オクラの山たより (70)

因了生

一

いつの時代であつても人はユートピア、つまり理想郷を心に思い描きます。生きていく上で何の心配もなく平和な世界。今も昔も変わらぬ理想郷はそうした世界ではないでしょうか。「ユートピア」という語をはじめて作った十六世紀の英国人トーマス・モアが書き記した理想郷は貧富の差を作らない原始共産制のような世界だつたそうですが、中国の古典の世界では「桃源郷」という言葉があるように六朝の詩人陶淵明の「桃花源記」がそのイメージづくりに決定的な影響を与えているようです。その「桃花源記」の内容を一部紹介すると次のようです。

ある日のこと。武陵の漁師がどこまで来たかも忘れて谷にそつて進んでいくと桃の花が美しく咲き誇る林があつた。桃の花びらが繽紛と川の面に散っている。不思議に思つた漁師がさらに進んでいくと桃の林が尽きたところに川の水源があ

つた。そのそばに小さな山があり、その山には小さな洞穴があつた。その洞穴に入つて数十歩も行くとなつぜん眼の前が開けて明るくなつた。土地は平らに開けて建物はいちと並び立っている。よく手入れされた田畑、立派な美しい池、桑や竹の類がある。田畑のあぜ道が縦横に通じ、鶏や犬の鳴き声があちこちから聞こえてくる。ここの住人は秦の時代の戦乱を逃れてこの里にきたのだが、外界との交渉をまったく絶つていたので、それからの数百年の歴史をまったく知らない。住人たちに歓待された漁師は数日間いた後にこの里を去つたが二度とこの里にはいくことができなかった。

日々の生活の貧しさ、労働の苛酷さに苦しむこともなく平和に暮らす人々。いつの時代にあつても私たち庶民の夢見る世界でしょう。その平和で豊かな世界を象徴するものは咲き乱れる桃の花、そして、あちこちから聞こえてくる鶏と犬の鳴き声です。もちろん、こうした世界を夢見るのは我々だけでなく蕪村もその一人でした。蕪村に次の句があります。

① 初午はつうまや鳥羽四ツ塚の鶏どりの声

蕪村六十四歳の句です。初午はつうまは二月(旧暦ですから今の三月です)最初の日。京都の伏見稲荷をはじめと

して全国各地の稲荷神社ではこの日に祭礼が行われます。鳥羽は京都市南郊にある鳥羽離宮のあつた場所です。四ツ塚は鳥羽へと向う鳥羽街道の出発点である羅城門付近の地名。ここは西国街道と鳥羽街道の合流点であり京への入り口でもあつたので商業の栄えた地でした。

早朝、伏見の初午大祭に出かけると四ツ塚や鳥羽のあたりは大変な賑わい。それにつられて夜明けを告げる鶏までもが鳴いた。この句の内容はこういったものでしょうが、「蕪村句集講義」によれば、この句について内藤鳴雪、河東碧梧桐、高浜虚子の三人が異なつた解釈をしています。鳴雪は初午の祭に浮かれすぎて帰りが明け方近くになつてしまい鳥羽四ツ塚で一番鶏の鳴き声を聞いた句だとし、碧梧桐は昼日中に鳥羽四ツ塚を通つたときの句だとし、虚子は初午の雑踏に対して鳥羽四ツ塚の静かさを詠んだもので特に時刻のこだわりはないとしています。誰の解釈が正しいのか私には判然としませんが、同じ蕪村に

② 初午や 物種売りに 日の当る

という句があります。「物種売り」とは初午に伏見稲荷の前で野菜や草花の種子を売る行商人のことです。その彼らに小春日和でしょうか、暖かそうな日があつています。ああ、もうすぐ本格的な春が来るのだ、という作者の思いがこの句に

はあります。①の句で蕪村が「初午や…」と詠み出したとき、蕪村の心の中にはやつと春めいてきた日差しがイメージがあつたに違いありません。長い冬を経て地上に注ぎ始めた春の陽光とのどやかな鶏の声を鳥羽・四ツ塚に配しているのです。名句・佳句というほどではありませんが、いつしか人を平和な春の里へといざなつていきます。

蕪村が心に思い描く理想郷は蕪村が生涯にわたつて愛し続けた漢詩文の世界から影響を受けたものでした。つまり宮仕えを嫌つた陶淵明が帰つていった田園であり、王維が徘徊した自由な山水であり、李白が好んだ別天地であり、白居易が閑適した別世界でした。その世界に共通して存在するのは桃の花、鶏の犬の声です。蕪村は鳥羽四ツ塚でのどかな鶏の声を耳にしたとき、中国の詩人たちが描き出した桃源郷を見出したのです。

陶淵明にとつてのどかな田園生活を描くのに必須なのは桃と李（すもも）、犬と鶏の声であつてことは次の詩からでもよく分かります。詩は書き下し文で紹介し原詩は文章末尾の補遺でまとめて示すこととします。詩の解釈は詩のすぐ後に「」で記します。

A 園田の居に帰るの詩 其の一

陶淵明

榆と柳とは後簷をおおい

桃李 堂前につらなる

曖曖（あいあい）たり 遠人の村

依依たり 墟里（きょり）の煙

狗（いぬ）は吠ゆ 深巷（しんこう）のうち

鶏は鳴く 桑樹のいただき

「榆や柳の枝が軒をかくし、家の前には桃や

スモモの並木が続いて、その向こうにぼう

とかすんだ村々からは懐かしい煙が立ち

のぼっている。村の中の小道では犬が吠

え、桑の木には鶏が鳴いている」

初午の日に鳥羽四ツ塚を歩んで行く蕪村

の耳に聞こえてきたのは、まさしくこの

鶏の声だったのでしよう。

桃源郷のイメージが蕪村にとつてどの

ようなものであつたかは次の句でも分か

ります。蕪村五十八歳の作です。

③ 商人（あきんど）を 吼（ほ）ゆる犬あり 桃の花

見慣れない行商人でも通りかかったの

でしょうか、桃の花が咲いている村の小道

で犬が吠えているという情景です。実景

とも考えられますが、かすかに陶淵明の

「桃花源」の趣があります。おそらくそ

うなのでしよう。

この陶淵明の語る理想郷を踏まえた詩

に李白の「山中問答」があります。

B 山中問答

李白

余に問ふ何の意ぞ 碧山に棲むと

笑つて答えず 心自ずから閑なり

桃花流水 窅然（ようぜん）として去る

別に天地の人間にあらざるあり

「ある人がこう問いかけた。なんでまたこん

な山深いところに住んでいるのだと。私は

笑つて返事をしない。そう問われても心が

波立つことはなかったのだ。満開の桃の花

がたぎつぎと川面に散り、はるか彼方まで

流されていく。ここは俗世間とは隔絶した

最高の地なのだよ」

陶淵明から発した「桃の花」のイメージ。

それは見事に李白に継承されているとい

つてよいでしょう。桃花が水に浮かんで

遙かに流れ去っていくというこの「桃花

源」のイメージを蕪村もまた受け継いで

います。

④ 水に散りて花なくなりぬ岸の梅

⑤ 玉川に高野の花や流れ去る

④の句は「梅」、⑤の句は「桜」で「桃」

の花ではありませんが花が川面に散つて

流れていくイメージは同じです。①の句

については蕪村自らが語っている霞夫宛

の手紙があります。

この句のうち見にはおもしろからぬ

ように候。梅といふ梅に落花いたさぬ

はなく候。されども樹下に落花の散り

しきたる光景は、いまだ春色も過ぎ行

かざる心地せられ候。恋々の情これあ

り候。

しかるにこの江頭の梅は水に臨み、

花が一片ちればそのまま流水が奪ひて

流れ去り去りて一片の落花も木の下に

は見えぬ。さても他の梅とは替りて哀

れなるありさま、すこすごと江頭に立

てるたたずまゐ、とくと御尋思さうら

へばうまみ出で候。御かみしめなさる

べく候。

この手紙の内容からすると「水に散りて

……」の句の主眼は自分が落とした花び

らを流水に奪われ落胆して立っている江

頭、すなわち川のほとりの梅にあつたよ

うです。

手紙全体の趣旨は門弟でありパトロン

でもあつた霞夫が父親の死にあつて愁い

に沈んでいるのを慰めたものですが、蕪

村の心の中に「桃花流水」のイメージが

強くあつたことをよく示しています。

⑤の句で「玉川」は高野山の奥の院の

あたりで杉木立の間をぬつて流れている

川のことです。その玉川に高野山の落花

が浮かんで流れ去っていくというのが句

の内容です。洞窟はありませんが、この

理想郷の表現だけではなく蕪村が漢詩文に親しみ、その世界からいかに多くの詩的なイメージをくみとって自己の俳諧の世界へ取り込んでいったかはすでに多くの人によって議論されてきました。すでに蕪村の死の直後、蕪村の友人であった上田秋成はその死を悼みつつ、実に正確に蕪村の本質を言い当てています。秋成は蕪村の訃報を聞いたと記した後には次のように書いています。長くなるので拙訳ですが私の口語訳で示します。

の身を去って己の終焉をよいかたちで迎えられたことをうらやみ、かつ、残された作品の素晴らしさを惜しみつつ

かな書きの 詩人西せり 東風吹きて

浪華 無腸

「無腸」は上田秋成の俳号です。文中に出てくる句を示すと、

* 「笠着てわらしはきながら」は

「年暮れて笠きて草鞋はきながら」

芭蕉（のざらし紀行）

* 「王母が鍋を霰のうつ」は

「玉霰漂母が鍋をみだれうつ」

蕪村

* 「牡丹を天の一方に」は

「広庭のぼたんや天の一方に」

蕪村

* 「釣りの糸に秋風を哀しび」は

「かなしさや釣の糸ふく秋の風」

蕪村

* 「花茨しげき路に古さとをおもふ」

は「花茨故郷の路に似たるかな」

蕪村

「釣りの糸に秋風を哀しび」「花茨（はなばら）しげき路（みち）に古さとをおもふ」はその意旨をきつとうつしたものである。これらの蕪村の句は仮名で書かれた唐詩ともいうべきだろうといつても人とも語り合ってきた。今や老残

て「笠着てわらしはきながら」一生旅を続けた芭蕉翁の大切な教えによるものだと思います。そして文章の末尾の句で「かな書きの詩人」と蕪村の本質を言つてのけます。近世の「詩」は漢詩のこと。もちろん「詩人」とは漢詩人のことです。

蕪村は若い日のころ、関東にあったとき、ひたすら芭蕉翁の幽懐を追い求めて、さらに「虚栗（みなしくり）」「冬の日」の高い芸術性を慕いました。そして、さらにその「虚栗」「冬の日」は芭蕉が自らいうように李白、杜甫、白居易の詩境を俳諧に移して芸術としての俳諧の高みに達する手助けとしたのです。

しかし、蕪村は芭蕉が李杜を慕うのに追隨していくばかりであったわけではありません。芭蕉よりもさらに深く漢詩文の世界に入りこんでいったといえます。それは蕪村が俳人であるとともに画人であり、中国の絵画に深く傾倒していったためでした。詩・画の一致をおのれの信条とする蕪村が中国の古典的な美の世界に「桃源」を求めていったことは当然のことといえます。ただし、蕪村は同時代の日本の漢学者や漢詩人たちが中国の古典の世界に浸りきってしまったという方向には進みませんでした。芭蕉が俳諧を芸術の高みまで押し上げようとするために李白・杜甫の詩境を自分の「初心を救うたより」としたとすれば、蕪村は中国の漢詩文を自分の詩の新たな世界を切り開く素材・材料ともいえます。

こうしたことは「桃源」だけのことに限りません。たとえば次の句です。

⑥ 鯪の面 世上の人を白眼むかな

芭蕉に「塩鯛の歯ぐきも寒し魚の棚」という句がありますが、どこかピリツとしたものがある芭蕉の句と違って蕪村の句はユーモラスな雰囲気があったよっています。「世上」という語感に魚屋の棚に置いてあるフグを見下ろす人間の眼と人間をにらみ返すフグの眼の交錯がうまく盛り込まれており「白眼む」という文字面からフグのむき出した眼が生き生きと表現されています。日常的な何でもないような情景の句ですが、研究者によれば「唐詩選」にある王維の「盧員外象と崔士興宗の林亭をよぎる（與盧員外象過崔士興宗林）」という次の詩からとられたイメージだそうです。

C 盧員外象と崔士興宗の林亭をよぎる

王維

緑樹重陰 四隣をおおう

青苔 日に厚うして自から塵無し

科頭にして箕踞（きぎよ）す 長松の下

白眼もて見る 他（か）の世上の人

「緑に茂る木は深い陰を作り、四方をおおっている。青い苔は日に厚みを増すの

で、地上には塵一つない。君は高い松の木の下で、頭はむき出し、大あぐらをかきながら、世間の俗人どもを、白い眼でにらんでいる」

この詩は王維が虚象と連れだつて崔興宗という在野の士が住む林の庵を尋ねたときの作です。面白いのは崔興宗の風貌。崔興宗は科頭つまり頭をむき出しにして高い松の木陰で大あぐらをかき俗人たちを白い眼でにらみつけていたのです。その超俗の姿に王維は感心したのでしよう。

ところが蕪村が興味を持ったのは崔興宗の超俗な生活ぶりではありません。蕪村が心ひかれたのは「白眼もて見る 他の上の人」という表現の視覚的なイメージでした。そして魚屋の棚に並べられたフグのふくらんだ面を見たときに彼はふと王維のこの詩句「白眼もて見る 他の上の人」が頭にひらめいたに違いありません。フグが崔興宗を思い起こさせたのではなく、むしろ「白眼もて見る」という語がフグの面の上に重なってきたといえます。こうして⑥の句が生まれたと考えられます。王維の用いた詩句が蕪村のイメージを触発したのです。

この作品だけではなく蕪村の多くの作品は漢詩文の詩句に刺激を受けて生まれたイメージによって生まれたものであることは幾多の蕪村研究者の指摘することです。漢詩文の世界をめぐって得た詩境

を自分の目で見たものに重ねて作品化していく。そうしたことでできた作品群が蕪村の佳句には多いのは確かです。

最初に示した初午の日に鳥羽そして四ツ塚で聞いたのどかな鶏の声と村の辻で吠える犬の声は蕪村に次の漢詩を思い浮かべたのではないのかと私はひそかに思っています。題名の「即事」とは「折りにふれて」という意味です。

D 即事 王安石

径(みち)暖かくして草は積む如く

山晴れて花さらに繁し

縦横 一川の水

高下 数家の村

静かに憩えば鶏は午(ひる)に鳴き

荒(くさむら)を尋ねれば犬は昏(たそがれ)に吠ゆ

疑うらくはこれ武陵源ならんと

「小道は暖かで草は積み上げたようにいっば

い。山が晴れて花は一段と数を増した。縦

横に曲がりくねる一筋の川の流れ。高く低

くあちこちに何軒かの家の村。静かにいこ

うと鶏が昼時に鳴き、草むらをわけていけ

ば犬はたそがれの中で吠える。家に帰って

から人に言った。あれこそ武陵の桃花源で

はなかったらうか、と」

「万緑叢中紅一点」や「緑陰幽草 花時にまさる」の名句で知られた王安石は北

宋の大政治家にして優れた文人でした。

鶏は午に鳴き、犬は昏に吠えている。まさにこの地こそ武陵の桃花源なのではないか、と王安石はいつているのですが、

蕪村が描いたあの鳥羽・四ツ塚、あの村はまさしく彼にとつての桃花源であったのではないか。そして、漢詩文とシンク

ロしながら彼の思い描く理想郷の彼方に見ているのはついに帰ることのなかった

故郷の毛馬の懐かしい風景ではなかった

かと、「春風馬埭曲」をくり返し読むたびに思うのですが、いささか感傷に過ぎ

ましようか。

【補遺】

◇ 本文中に引用された漢詩の原詩

A 帰園田居詩 其一 (部分)

陶淵明

榆柳蔭後簷

桃李羅堂前

曖曖遠人村

依依墟里煙

狗吠深巷中

鶏鳴桑樹巔

桃花流水杳然去

別有天地非人間

C 與盧員外象過崔兪士興宗林亭

王維

綠樹重陰蓋四隣

青苔日厚自無塵

科頭箕踞長松下

白眼看他世上人

D 即事 王安石

径暖草如積

山晴花更繁

静憩雞鳴午
荒尋犬吠昏
归来向人説
疑是武陵源

日本書紀と扶桑略記には蘇我馬子が法興寺(元興寺・飛鳥寺)を建立したという記事があります。今回は、その記事の核心部分が史実であるということについてお話ししたいと思います。

隠された歴史(45) 満田 正賢

日本書紀における法興寺関連記事の核心となる部分は次の記事の下線部分です。

を合わせて記しています。これらの記述が法興寺関連記事の核心部分であると考えます。

①蘇我馬子宿禰、請百濟僧等、問受戒之法、以善信尼等付百濟國使恩率首信等、發遣學問。壞飛鳥衣縫造祖樹葉之家、始作法興寺、此地名飛鳥眞神原、亦名飛鳥苦田。是年也、太歲戊申。（*戊申は五八八年）…崇峻紀元年（五八八）条

法興寺が飛鳥寺であり、百濟の支援によつて建立されたことを裏付ける考察をご紹介します。「古代日本の東アジア交流史」（勉誠出版）に載っている百濟王興寺と法興寺（飛鳥寺）の共通性に関する鈴木靖民氏の考察です。

②春正月壬寅朔丙辰、以佛舍利置于法興寺刹柱礎中、丁巳建刹柱。…推古紀元年（五九三）条

①二〇〇七年夏、韓国扶余での百濟王興寺跡の発掘調査により、木塔跡の心礎の舍利孔から円筒形の青銅製舍利函が出土した。なかには銀製舍利小瓶が入れ子状に入っており、青銅製函の外面には、「丁酉年二月十五日百濟王昌為亡王子立利本舍利二枚葬時、神為三」と陰刻されていた。「丁酉」は西暦五七七年に当たり、その二月十五日、つまり釈迦入滅の日を選んで百濟王昌（威徳王）が亡き王子のために刹、すなわち塔の中心の柱を立てた。舍利（釈迦の遺骨）が二枚あったが喪葬の時に神変を生じて三枚になったとの靈異を記す。寺院が亡き王子のために百濟王が建てた寺院であることが記されており、「三國史記」以来史書に知れたる王興寺が文字通り王の興した寺、すなわち勅願寺であることが判明した。

③冬十一月、法興寺造竟、則以大臣男善徳臣拜寺司。是日、慧慈・慧聰二僧始住於法興寺。…推古紀四年（五九六）条

③（中略）このような舍利埋納、莊嚴の仕方、ことに埋納品の種類は（中略）装身具こそが百濟と酷似するものであり、すべてを百濟に倣ったのではない。むしろ多くはいわれる通り古墳の横穴式石室から出土する副葬品に類似する。（中略）この王興寺や陵山里寺の場合も王陵の副葬品と同一の埋葬品があることを思うと、倭国が百濟の方式に倣ったと考えられる。

④冬十一月、法興寺造了。天皇設无遮會供養之、今元興寺是也…推古四年条

④（中略）これらの事実を重視すると、飛鳥寺の出土品はおそらく仏舎利とその容器と並んで、舍利莊嚴具も百濟の最新の造寺のマニユアルに基づいて、百濟からの贈与品、将来品を準備したか、あるいは倭国の地

①正月、蘇我大臣馬子宿禰、依合戰願於飛鳥地建法興寺、立刹柱、曰、嶋大

臣并百餘人皆着百濟服、觀者悉悅。以佛舍利籠置刹柱礎中。…崇峻元年

条

②冬十一月、法興寺造了。天皇設无遮會供養之、今元興寺是也…推古四年条

日本書紀も扶桑略記も、法興寺は蘇我馬子が飛鳥の地に建造し、仏舎利を刹柱礎の中に納めたと記しています。又、扶桑

略記は、蘇我馬子等百餘人が百濟服を着たこと、法興寺は今の元興寺であること

②一九五六〜五七年、三次にわたる奈良

泉明日香村の発掘調査によつて、同寺の一塔三金堂形式という独自の伽藍配置などが明らかとなり、研究者の関心を惹いた。高句麗、百濟の寺院との関係が議論され、屋根瓦、特に創建時の軒丸瓦の文様の類似性が留意されてきたが、王興寺跡の新たな出現によつて特に注視したのは、かつて半世紀以上前に出土した塔心礎と出土遺物である（奈良国立文化財研究所一九五八）。というよりも、私は扶余博物館で王興寺の心礎の写真と遺跡群を目にした瞬間、飛鳥寺との類似を直感したのである。

で百濟に倣い、渡来した博士などの技術指導によつて各種の貴金屬、貴石の工芸品を忍海部や鞍作部などの工人が金工、木工の手工業技術を習得して製作したことを強く示唆する。王権の主導の下にいくつかの工人集団の組織化と協業が進められたと考えられる。

⑤百濟の工人の存在形態に関して、「三國遺事」塔像・皇龍寺九層塔条には、七世紀中葉、新羅の善徳王の時、皇龍寺の九重塔の建造に際して群臣が百濟の工匠を招聘したと伝える。（中略）なお加えて「三國遺事」紀異・武王条に百濟の弥勒寺の造営に際して新羅眞平王が百濟を送つて援助したとの伝承に着目した熊谷公男氏は、百濟がその返礼として阿非以下の技術者を派遣したかもしれないとする。そうであれば、百濟・新羅間の双務的な技術援助、交流関係として重視される。政治的・軍事的対立とは別の国境を超えた、共有する思想・信仰などに根ざす仏教次元本来の秩序・交流によるものかと考えられる。

飛鳥寺発掘調査の段階では、韓国扶余での百濟王興寺跡の発掘調査は行なわれていませんでした。王興寺跡発掘調査当時の考古学者の反応について、中央日報（*韓国の日刊新聞）は次のような記事を載せています。

・『新聞（*日本の新聞）は「早稲田大学の
大橋一章教授（仏教美術史）」ら日本
の研究チームが今月初め、扶余の王興
寺遺跡地を調査した結果、ここで出土
された瓦の文様と塔の構造などが飛鳥
寺の遺物とほとんど一致する」と明ら
かにした。大橋教授は「二つの寺が同
じ技術者によって創建されたという点
に異見がない」とし「日本に仏教を伝
えた百済が仏像やお経を贈ったが、な
かなか広まらないことから本格的な布
教のために王興寺をモデルに飛鳥寺を
創建したものだ」と述べた。』

・『飛鳥寺は日本で唯一の一塔三金堂式
だ。王興寺は塔と金堂、講堂が一直線
につながった四天王寺式だと見られ
るが、回廊の東西にある付属の建物が
後日、飛鳥寺を作るときには金堂に変
わったはずだと新聞は伝えた。一緒に
研究に参加した国学院大学の鈴木靖
民教授（古代史）は「飛鳥寺創建は百
済王と倭王の間の活発な交流を意味
するもの」とし「歴史書に『当時権
力者だった）蘇我馬子が落成式のとき、
百済の服を着て参列した』という記録
もある」と説明した。』

・『二つの寺の関連性は、韓国国立扶余
文化財研究所が昨年十月、王興寺から
掘り出した金銀・青銅舍利容器に刻ま
れた創建年度を手がかりに初めて提
起された。舍利容器には「百済王の発
願で（王興寺が）五七七年二月に創建

された」となっている。日本書紀によ
ると同年十一月、百済王が日本に寺の
技術者たちを送り、十一年後の五八八
年、当時、権力を握っていた蘇我馬子
が飛鳥寺を創建した。』

次に扶桑略記に関する考察です。扶桑
略記は、平安後期に阿闍梨皇円が編纂し
たものと伝えられていますが、平田俊春
氏の「扶桑略記の研究」によると、扶桑
略記は、すべて他の文献の引用によつて
取り纏められており、その叙述において
は引用史料の出典を註記しているところ
が多いが、出典を記していない叙述もあ
るとしています。そして平田氏は扶桑略
記の引抄の形式の特徴や、扶桑略記の引
抄の態度の特徴を分析しています。又、
平田氏は扶桑略記が引用した文献の中
には逸書（現存しない文献）となっている
ものも見られるとして、日本後紀など、
多くの逸書を挙げています。

この逸書となっている文献の存在につ
いて、前述の鈴木靖民氏は「古代日本の
東アジア交流史」の中で、「馬子以下が催
した儀式の記述は、（中略）最澄『顕戒論』
が触れる『元興縁起』のとき、『元興寺
縁起』の『豊浦寺系縁起』とは別系統の
八世紀に遡る依拠すべき元興寺の文献、
いわゆる『元興寺系縁起』が存在し、記
述があったことを認めても良いのではな
いか。』と述べています。

私は、扶桑略記の『正月、蘇我大臣馬
子宿弥、依合戦願於飛鳥地建法興寺、立

刹柱』という記事は日本書紀をベースに
したものと考えます。日本書紀では推古
元年条に記されている『以佛舍利籠置刹
柱礎中』という記述が崇峻元年条に記さ
れているのは、平田氏の「扶桑略記引抄
の態度の特徴」の中の一つである「同一
書物で異なった条を一つにまとめたり、
あるいは二つの書物を併せて一つにまと
めたりする場合に、無理な作為をして、
全く新たな異説のもとをなしている場合
が少なくない。」に該当していると考えま
す。

『鳴大臣并百餘人皆着百済服、觀者悉
悦』については、平田氏の考察に従えば、
何らかの元史料（逸文）があったと考え
られます。又、『今元興寺是也』という文
面は、平田氏の「扶桑略記引抄の態度の
特徴」の中の一つである「略記の本文は
すべて他の文献の引抄であつて、編者の
記文は殆ど見出せず、その意見をいう場
合は分註において「私云」とことわつて
いる」に従えば、扶桑略記の編者の意見
ではなく、他の文献の引抄ということに
なります。この『今元興寺是也』という
文面が載っていることから、鈴木氏が言
うように、現在に残る元興寺縁起（*豊
浦寺系縁起と呼ばれる。）とは別のいわゆ
る「元興寺系縁起」の存在を想定せざる
を得ないと考えます。

ここからは、私の仮説です。飛鳥寺発
掘調査と韓国扶余での百済王興寺跡発

掘調査によって得られた両寺跡の塔心礎
と出土遺物の共通性は無視できないと考
えます。

法興寺の一塔三金堂方式について、鈴
木靖民氏は「王興寺は塔と金堂、講堂が
一直線につながった四天王寺式であるが、
回廊の東西にある付属の建物が後日、飛
鳥寺を作るときには金堂に変わったはず
だ」と考えましたが、古田史学の会の服
部静尚氏は、「発掘状況を詳細に観察する
と左右の金堂は後代作られたのではない
かと思われる」と述べています。

一塔三金堂方式については、高句麗様
式という見方が一般的ですが、新羅を代
表する寺である皇龍寺は、創建時（五五
三年）一塔一金堂方式をとっていました
が、統一新羅時代に高句麗様式を取り入
れて一塔三金堂方式になったことが、一
九七八年から八年間の発掘作業によつて
明らかになっています。日本書紀には法
興寺の建立後、高句麗僧慧慈と百済僧慧
聰が法興寺に住んだと記されており、鈴
木氏が考察したように「仏教次元本来の
秩序・交流」があったと考えれば、新羅
皇龍寺の新様式が朝鮮半島と日本の僧侶
間の交流によつて、創建から百年近く経
つてから日本の法興寺にも追加された
と考えることが出来るのではないでしょ
うか。

法興寺と百済王興寺との共通性という
考古学的検証は、日本書紀と扶桑略記の
法興寺記事の核心部分と合致しており、

日本書紀の記事が史実であることを裏付けていると認めざるを得ないのではないかと考えます。

前述の鈴木靖民氏は、法興寺の建った場所が今の『飛鳥寺』の建つ場所であることを論じていますが、それが蘇我馬子によって建てられたという日本書紀の核心部分を軽視し、近畿天皇家を中心とするヤマト王権が建てた寺であることの裏付けとして紹介しています。しかし、蘇我馬子と近畿天皇家は切り離して論じるべきです。現存する元興寺縁起（豊浦寺系縁起）では、法興寺（元興寺）は用明天皇の勅命によって推古天皇と聖徳太子が建てた寺であるという説明がなされています。それが真実ならば日本書紀も当然そう書いてなければなりません。

日本書紀が、蘇我馬子が法興寺を建てたと記したのは、それが史実であったからであること以外には考えられません。参考までに、九州王朝論の立場で九州王朝が法興寺を建てたと仮定した場合、日本書紀編纂の目的からすれば、九州王朝を近畿天皇家に置換えれば済むことであって、蘇我馬子が建てたと書く必要はありません。結論として蘇我馬子が法興寺を建てたのは史実を反映したものであることを認めなければならぬと考えます。蘇我馬子が百済に支援を依頼し、百済が勅願寺たる王興寺建設に携わった工人集団を派遣したとすると、百済王朝が王として認めていたのは蘇我馬子だったとい

うことになります。

上宮聖徳法王帝説では、日本で最初に法王と呼ばれたのは聖徳太子であるとしています。私には、蘇我馬子は自らが作った「欽明天皇家」と並立する形で「上宮家」を立ち上げ、「欽明」天皇家と「上宮家」の二頭政治を行なっていたのではないかと、厩戸皇子は推古天皇の皇太子ではなく、上宮法王（蘇我馬子）の皇太子ではなかったかと考察してきました。日本書紀が聖徳太子（厩戸皇子）の崩御日を誤って記しているのは、蘇我氏に残る記録が乙巳の変の際にほとんど燃やされており、日本書紀の編者が推測で書いたからであると考えられます。

「法興寺」という名前には、百済の「王興寺」王が興した寺」という名前に対抗して「法興寺」上宮法王が興した寺」という意味が込められているように思われます。だからこそ「法興寺」という名前は上宮家と蘇我本宗家の滅亡後に「元興寺」という名前に変えられたのではないのでしょうか。

プロパガンダに騙されるな — 学び直そう戦争と憲法の歴史 (四) —

成瀬 和之

ドイツでヒトラーが政権を握ると、

一九三六年にはフランスとスペインで、ファシズムに対抗しようとする人民戦線政府が選挙によって成立しました。しかし、スペインでは君主派などに支持されたフランコ将軍が反乱を起こしました。フランコはヒトラーの支持をえ、イタリアもこれを援助しました。こうして、スペインは国際的なファシズムと反ファシズムの戦場となりました。反ファシズムの義勇軍には作家のヘミングウェイも参加し、その体験から『誰がために鐘は鳴る』を書いたのです。

一九三七年四月二六日、フランコ将軍の要請で、ナチス・ドイツはスペインの古都ゲルニカを無差別爆撃し、全滅させました。これに衝撃を受けたピカソは、ドイツ軍の空爆によって大きな被害を受けたゲルニカの町を題材に大作『ゲルニカ』をいっきに書き上げました。パリ万国博覧会の壁画として、当初の予定を変更して、わずか一カ月で仕上げたのです。直接的に爆撃を想起させるものは何も描かれていませんが、ミノタウロス（ギリシャ神話に登場する半人半牛の怪物）、母と子、曲芸師など彼の好んだ主題を、すべてネガティブに反転させて描いたのです。それゆえに人間の暴力と悲劇に対する普遍的で強烈な反対の意思を表現しようとしたのです。

自民党などが「ウクライナを見る」と「日米同盟の強化」を声高に言っています。はたして本当でしょうか？ ヨーロッパ

パではソ連崩壊後、欧州安全保障協力機構（OSCE）という、ロシアを含めすべての国が参加する包括的な枠組みがありました。ところがOSCEの機能は生かされず、NATOによって相手の攻撃を「抑止」という戦略を進め、「力対力」に陥りました。ウクライナ侵攻の責任はもちろんロシア・プーチン政権にあります。こうして外交の失敗が戦争と言った結果につながりました。この失敗を東アジアで繰り返してはいけません。「力と力」に陥って、排他的な軍事ブロックによる対抗の強化は戦争につながります。ヨーロッパから引き出すべき教訓は、ここにあります。

さて、ゲルニカ爆撃と同じ年である一九三七年の日本はどうだったでしょうか？ ロシアのウクライナ侵略は、日露戦争や「満州事変」を「成功事例」とみなし、深みにはまっていた日中戦争と共通点があることを、前回まで述べてきました。

一九三七年七月七日、北京郊外の盧溝橋付近での日中両軍の衝突から日中戦争は始まりました。政府は、この戦争をはじめ「北支事変」と呼びましたが、宣戦布告のないまま日中全面戦争へと発展していきました。日中戦争が始まると、新聞・ラジオはいっせいに戦争熱をあおり、国民の中に戦争支持熱が高まりました。これを背景に、近衛内閣は、国民を戦争体制に動員するため、「バスに乗り遅れる

な」というスローガンの下、国民精神総動員運動を開始しました。そのような情勢の中で哲学者の戸坂潤は一九三七年九月号の雑誌『改造』に「挙国一致体制と国民生活」という一文を書いています（一九三七年八月執筆）。その要点を紹介しましょう。

数か月前までは、国防予算ないし軍事予算の膨大と国民生活の安定とは、事実上において相克する関係にあるということが、国民の常識となっていた。

ところが、今回の事変は、いわば政治的には戒嚴令的な作用を営んだのだ。

挙国一致体制によって、例の軍事予算と国民生活安定との関係という政治的根本問題は問題そのものとして解消してしまったのだ。

今日の現実の「挙国一致」の体制は、国民生活の単なる観念的安定に過ぎない。（中略）それが現実の国民生活安定の代用品として勧められているゆえんがこれであり、またこれが国民生活安定という課題自身の廃棄になると私がひそかに考えられているゆえんでもある。

もって回った言い方になっていますが、これは言論統制の厳しい状況の中で、ぎりぎりまで軍事予算と国民生活の關係に言及した文章なのです。一九三七年二月に戸坂潤は内務省から執筆禁止の内示を受けました。不幸にも戸坂の予言通り、一九三八年四月には国家総動員法が公布されるに至ります。そして一九三八年一

一月二九日戸坂は逮捕され、一九四五年八月九日（敗戦の一週間前）に獄死しました。

翻って今の日本です。七月一〇日投票で参議院議員選挙が行われます。今回の選挙は「戦争か平和か」日本の進路がかる重要な選挙です。

岸田政権は、ロシアのウクライナ侵略を口実に、軍事同盟中心で「力対力」の大軍拡の道を進もうとしています。国民にとつては最悪の暮らし破壊の道です。

自民党は軍事費をGDP（国内総生産）比二パーセント以上二年間十一兆円以上に増額すると提言しています。財源に触

れていませんが消費税増税や社会保障費の大削減ならざるをえません。維新の会も九条改憲案、「核共有」などとあり、国民民主党も初めて予算案に賛成する

など、日本国憲法と平和を壊す「翼賛政治」化が進行しています。今回の参議院選挙で改憲勢力が三分の二を超えると、三年間選挙がなく、改憲のための「黄金の三年間」となり、改憲勢力にフリーハンドを与えることになってしまいます。

「日銀は政府の子会社だ」安倍晋三三元首相は5月9日、大分市での会合で言い切りました。この発言は、戦前の政府と日銀の關係が現代日本にそっくりり当てはまっていることについての正直な告白です。戦前の政府・軍部は当時の日銀を利用して戦費調達のための軍事国債を増発しました。

亡国の安倍岸田政権は、最悪の「政府債務大国」なのに、軍事費を倍増し、軍備を増強しています。どこにそんな財源があるのでしょうか。安倍氏らがあてにするのは、財源調達のために発行された国債を日銀が買い入れ続けることです。まさに日銀は「政府の子会社」化しているのです。軍事予算の増額に対応し、日米の軍需産業ビジネスが活発化しています。これは戦争に通じる「いつか来た道」、亡国の道でしょう。

世界平和アピール七人委員会（大石芳野、池内了、池辺普一郎など）は六月二

四日、アピール「平和国家として歩む軍事力増強とは異なる道を」を発表しました。アピールは、軍事力強化は「かえって戦争を招きかねないことを強く明記すべきである」と警告しています。戦争状態に入れば理性の声は吹き飛ばすため「戦争に巻き込まれない日本とすることこそが最も肝要」で、対話と相互理解、平和的共存を追求すべきだと述べています。

だから今、「戦争プロパガンダに騙されるな！」なのです。ピカソが「ゲルニカ」をなぜ書いたのか、思い出しましょう。

俳句

土田 裕

短夜や夢に疲れて覚めにけり
万緑の郡上八幡谷深し
氷菓手にテレワークてふ宮仕え
十葉や表札傾ぐ別荘地
早苗田や一両電車行き違ふ

影山 武司

長梅雨や画面の孫にそつと触れ
梅雨寒や手斧の痕のざらつきて
白シャツの列に吞まるる通学路
夕立風土の匂ひを連れてきし
海見ゆる峠の道の花蜜柑
万緑に分け入る登山電車かな
片蔭や手持ち無沙汰の魚店
藻刈舟鎌引く水の迫り上がり
干草を巻き上げ風に日の匂ひ
文字摺草明かせぬままの恋心

編集後記

SK生

本号が皆さんの目にとまるころ選挙は終わっていることだろう。本号にも日本の未来を危ぶむ声が寄せられた。我々の日々の平和で安定した暮らし、子ども達の未来どうなるのか。どれも運命のなすがままにさせたくはないのだが。

復帰五十年の沖縄

「本土復帰」五十年の沖縄で、六月二十三日、「沖縄全戦没者追悼式」があった。今年「平和の詩」を朗読したのは、小学校二年生の徳元穂菜さん（七歳）であった。家族で宜野湾市にある美術館に行き、丸木位里・俊夫妻の「沖縄戦の図」を見たときのことをうたった詩である。

こわいをして、
へいわがわかった

沖縄市立山内小学校二年

徳元穂菜

びじゅつかんへお出かけ
おじいちゃんや
おばあちゃんも
いっしょに
みんなでお出かけ
うれしいな
こわくてかなしい絵だった
たくさんの人がしんでいた
小さな赤ちゃんや、おかあさん

風ぐるまや
チヨウチヨの絵もあったけど
とてもかなしい絵だった

おかあさんが、
七十七年前のおきなわの絵だと
言った
ほんとうにあったことなのだ

たくさんの人たちがしんでいて
ガイコツもあった
わたしとおなじ年の子どもが
かなしそうに見ている

こわいよ
かなしいよ
かわいそうだよ
せんそうのはんたいはなに？
へいわ？
へいわってなに？

きゆうにこわくなって
おかあさんにくつついた
あたたかくてほっとした
これがへいわなのかな

おねえちゃんどけんかした
おかあさんは、二人の話を聞いて
くれた

そして仲なおり
これがへいわなのかな
せんそうがこわいから
へいわをつかみたい
ずっとポケットに入れてもって
おく

ぜったいおとさないように
なくさないように
わすれないように
こわいをして、へいわがわか
った

玉城デニー知事は、戦後七十七年の沖縄の歩みと復帰五十年を迎えてもなおある沖縄の現実を訴えるときともに、ウクライナで起こされた戦争に触れた。

「ウクライナではロシアの侵略により、無この市民の命が奪われ続けています。美しい街並みや自然が次々と破壊され、平穏な日常が奪われ、恐怖と隣り合わせで生きることを余儀なくされている状況は、七十七年前の沖縄における住民を巻き込んだ地上戦の記憶を呼び起こすものであり、筆舌に尽くし難い衝撃を受けております」
そして、「私たちは、沖縄から世界へ平和の声をつなげ、二度と沖縄を戦場にさせないために、核兵器の廃絶、戦争の放棄、恒久平和の確立に向け絶え間ない努力を続けてまいります」と決意を述べた。
この国は、つまるところこの国民は、沖縄をいつまで、

もはや戦後ではない戦前の島

のままに留めておくのだろうか。
そしてまた、けなげな幼い声に耳を傾けると、この声を守るためには同盟による抑止力と、自分の力が必要であるなどとという、骨のない叙情にどこまで流されてゆくのだろうか。

折々の花



ヒオウギの花

これは京都では祇園祭の宵山の屏風祭りに欠かせない花です。

折々の花 七月



一夏咲き続ける鮮やかなダリアの花



蓮の池は静謐につつまれて・・・



ノウゼンカズラの夏

(効率よく印刷される場合は、このページを除いてください。)